# 雅　楽　だ　よ　り

目次


● 『芝祐靖先生　お別れの会』　1
● 蘆舌用葦材の物性　Ⅰ　小幡谷英一　1
● 芝祐靖先生への追悼の言葉　豊英秋　ほか　2
● 五節舞　よもやま　森本美恵　10
● 2019 年度 MP プログラムを終えて　山本華子　12
● ジャンルを越える雅楽器の魅力　アリシア　13
● 情報欄　14
● 『雅楽のコスモロジー』小野真龍著　16
● ヨシ原焼きにみんなで雅楽を　16



第 59 号　2019 年(令和元年)10 月
発行　雅楽協議会


## 『芝祐靖先生　お別れの会』

芝祐靖先生が7月5日午前、悪性リンパ腫のため東京都内の自宅で永眠されました。83歳でした。告別式は近親者で営まれ、「芝祐靖先生　お別れの会」が実行委員会（実行委員長宮田まゆみ、伶楽舎、芝祐仁）により8月8日午後2時より、都内サントリーホールブルーローズ（小ホール）を会場に開かれました。会場の正面奥に芝先生の写真を囲むようにお花が飾られ（写真①）、会場の周りには芝先生の作曲された譜面や演奏会のプログラム、そして写真などが多数展示され多くの方々が食いいる様に見つめていました。（写真②）

「お別れの会」は、宮丸直子さん（伶楽舎）の司会で進められ、まず芝先生作曲の「呼韓邪單于」より「第6曲　異郷憂心」が伶楽舎の皆さんにより演奏されました。（写真③）

芝祐靖先生
写真提供　伶楽舎

続いて宮田まゆみさんの心のこもった芝先生への感謝の言葉が話され（写真④）、豊英秋氏（元　宮内庁式部職楽部首席楽長・十二音会委員長）のお話しの中では、朗詠「嘉辰」を安齋省吾氏・大窪永夫氏（共に元首席楽長）と共に3人で朗々と歌われました。（写真⑤）

さらに、芝先生の笛の音「一行の賦」が会場に流され、あたたかな雰囲気の中で「お別れ会」は進み、各界よりのお話しに続き、天理大学雅楽部により「伎楽」（芝祐靖作曲「行道乱声、酔胡急、獅子、曲子」～獅子奮迅～）が演じられ（写真⑥）、芝祐靖先生作曲の「西寺」も伶楽舎により奏され、最後に、実行委員会の呼びかけに応えて楽器を持参した多くの方々により「盤渉調　越殿楽」が奉奏されました。（写真⑦）（2ページ上段に続く）

「芝祐靖先生お別れの会」会場正面。花に囲まれた遺影と机の上に愛用の笛　写真①

## 『蘆舌用葦材の物性 Ⅰ
### ～葦の組織構造と伐採時の選別基準について～

筑波大学 生命環境系　小幡谷　英一

### 1　鵜殿の葦

古くから、篳篥の蘆舌には、淀川流域の鵜殿地区で採れる葦が最良と言われてきました。ただ、近年の周辺環境の変化によって、良い葦が採れにくくなっているとも言われています。そこで2014年、蘆舌用葦材の持続的かつ安定的な供給と、効率的な選別手法の確立に向けて、葦の物性（物理的性質）に関する研究がスタートしました。ここでは、これまでに得られている研究成果のうち、篳篥奏者のみなさまに関係がありそうな内容をわかりやすく解説することで、「葦や蘆舌に関する正確で客観的な情報」を提供したいと思います。

蘆舌に使われる *Phragmites australis* は、決して珍しい種類の葦ではなく、日本国内のいたるところに生えています。また、葦は水辺にしか生えないと思われがちですが、実際には、水に浸らない乾いた土地でも育ちます。なお、「ヨシ」「芦」（8ページ1段へ続く）

その音色は会場を包み込みました。厳かな中にも暖かい想いの満ちあふれる「お別れの会」でした。

≪≪≪≪≪≪≪≪≪≪≪≪≪≪≪

芝祐靖先生に縁（ゆかり）のある方々より追悼のお言葉を頂いたので掲載します。（順不同です）

## 芝先生の想い出
## いつまでも心の中に

豊　英秋
元宮内庁楽部首席楽長

芝先生に初めてお会いしたのは、私が中学一年生で宮内庁楽部の予科の楽生になった時で、その時に先生から洋楽のソルフェージュを教えていただきました。先生は楽師になったばかりだと思います。やがて先生の音楽や雅楽に対する熱い思いから、いろいろな事を学ばせていただきました。

楽師になってからは、先輩後輩の間柄となりますから、雅楽の演奏会の後などは、よく酒を酌み交わしながら楽しく過ごしました。また先生は、スポーツマンでした。官庁のソフトボール大会では宮内庁を代表する４番バッターで、先生の活躍で宮内庁が優勝していたと思いますし、他にピンポン、ゴルフ、麻雀などもご一緒しました。先生との楽しい想い出がたくさんあり過ぎます。しかし、雅楽に対して満足されるという事は無かったのだと思います。いろいろな事に対して「ダメだよ」といわれる。雅楽に対しては厳しかったです。

先生は広く世界にはばたかれ、名演、作曲、復曲はもとより、教育者としては多くのすぐれた弟子たちを育てました。

そしてなにより楽部を退職されてから「子どもたちへ雅楽を伝えていかなければいけない。子ども達こそ雅楽を継いでいかなければといけない」とのお考えから全国各地の小中学校を巡って、雅楽を演奏されていきました。

芝先生とご一緒させていただいたのは、楽部では先生が宮内庁楽部を退官されるまでの40年、さらに現在までですと63年にもなります。私達が一メートル四方を見たり考えたりしていたとしますと、芝先生は無限大の広さを持って音楽や、雅楽をそして芸術を考え、かつそれを行動され実現させていきました。その業績は１００年先、１千年先へも語り継がれていくことと思います。先生と子どもの時から同じ時代に雅楽の道を歩ませていただいたことは本当に幸せに思います。

「芝祐靖先生　お別れの会」で私の話の最後に朗詠「嘉辰」を歌わせていただきました。「嘉辰」は「この喜びはいつまでもつきることがない」という意味のおめでたい曲ですので、「お別れの会」の席には相応しくないのかもしれませんが、私は「芝祐靖先生との長い御付き合いの中での喜びはいつまでもいつまでも心の中に残っていて、つきることがない。この喜びを多くの人と語り継いでいきたい」との願いを込めて「嘉辰」を歌わせていただきました。会場の皆さんに「ご一緒に歌ってください」とお願いしましたら会場のあちこちから歌声が聞こえて参りました。歌いながら「ここに参加の皆さんもきっと芝先生から喜びや、楽しみを　たくさんたくさん頂いた方々なのだな」との思いが湧き出てきて、芝先生の偉大さと、その優しいお人柄をさらに実感させていただきました。

芝祐靖先生は亡くなられましたが、これからは先生の想いの一端でも引き継いで歩んでいきたいと思っています。

芝先生の写真、譜面、プログラムなどがロビーに飾られ、多くの方々が見つめる。写真②

芝先生作曲の「呼韓邪單于」より「第６曲　異郷憂心」が伶楽舎の皆さんにより奏された。写真③

「お別れの会」で朗詠嘉辰を歌われる豊英秋氏（中央）、安齋省吾氏（右）、大窪永夫氏（左）　　写真⑤

## 芝　祐靖先生に感謝をこめて

宮田まゆみ

芝先生にご指導いただいて40年経ちました。何から申し上げたらよいかわからないほ

ど感謝の気持ちでいっぱいです。先生はお若い頃から数々の素晴らしいお仕事を重ね、私たちからは遠く、高く高くそびえる山のような存在でいらしたにもかかわらず、普段は山のふもとの私たちのところまで降りてあたたかくご指導下さいました。誰に対しても、一人一人、優しく親身に接して下さった先生。私たちはそれにすっかり甘えさせていただきました。

40年前、先生と一緒に演奏させていただくなんて想像もできないことでした。何年かのち、なんとそれが現実となったのです。もちろん大変緊張しました。ところが不思議なことに先生と一緒に演奏させていただくと自分の音楽がなんの抵抗もなくするすると引き出されてきたのです。驚きました。そしてこの上なく幸せな気持ちがしました。私は雅楽の中では主に笙演奏を担当しています。お稽古の時に先生は笙に対してはあまり細かいことはおっしゃいません。でも先生が演奏していらっしゃるとその流れに引っ張られて、どの楽器も自然に調和していくのです。

細かいことをおっしゃらないと申しましたが、随分前に一度だけ、笙という楽器の近年の様子について「近頃の笙は音が硬い。笙は遠くから柔らかく響いてくるのがよい」という意味合いのことをおっしゃったことがありました。このことは先生が常々注目なさっていた、雅楽のピッチの上昇とも関係があるのかもしれません。それ以来、先生の理想の笙はどんな響きだろうか、こんな響きだろうか、といつも模索しています。

「お別れの会」の最後に盤渉調越殿楽を参集の方々と共に献奏　写真⑦

芝先生はその御笛の響きでさまざまな音楽の世界を私たちに示してくださいました。

御神楽の「庭火」の、この世のものとは思われぬ深遠な世界。龍の飛翔のような古典曲の数々。躍動感に満ちた伎楽。大人も子どもも心底から楽しめる子どものための雅楽「ポン太と神鳴りさま」や「カラ坊風に乗る」。

先生から学びたいことはまだまだ、まだまだ際限なくあります。これからも私たちは、先生はどのようにお考えになるだろうか、どのようにお教えくださるだろうかと問い続けながら勉強していくことと思います。先生に「お別れ」を申し上げることはきっと一生ないでしょう。どうぞこれからもよろしくお願いいたします。

芝先生、素晴らしい音楽の世界を教えてくださりありがとうございます。

心から感謝申し上げます。

（笙奏者）

「お別れの会」でお話しをする宮田まゆみさん　写真④

## 文化功労者、文化勲章受章者

### 芝祐靖氏　死去

### 東儀道子

祐靖さんが亡くなった。7月5日のことである。祐靖さん・・・などと気安くお呼びするのは、私の夫、故 東儀俊美の六歳年下の楽師として宮内庁楽部でも、また、退官された後にも共に活動してきた間柄であるからである。平成の初め、発行された80円切手に四人舞「太平楽」の図柄のものがある。その二蕨が俊美で、四蕨が祐靖さんである。氏は宮内庁楽部の楽師として26年在職後、退官され、笛の奏者として活躍された。その笛は父君祐泰先生の大迫力の笛とは違って、面影はありながらも少し穏やかなものであった。また、伶楽舎を設立されて雅楽演奏活動を行われた。その間、多くの廃絶雅楽曲を復曲し、雅楽オーケストラともいうべき新曲を作曲された。それらは　オーケストラ作品集「幻遙」に含まれる。清雅・華麗・重厚・壮大なそれらの曲に包まれながら、ご冥福を祈りたい。

## 追悼

### 寺内直子

芝先生が亡くなった。東京藝大で雅楽を初めて教えていただいた時から、先生は私たちにとっては、いつまでもそこにいて見守ってくれるお父さんのような存在であった。先生がこんなに早く旅立たれるとは想像もしていなかったので、正直言ってまだ実感が湧かない。しかし、私たちはもはや先生の笛の音を聴くことはできず、先生の復元や新作品のリストに楽曲が増えることも無い。もちろん、先生はたくさんの録音や作品の楽譜を遺されたので、それらを通して先生の芸術をうかがい知ることはできる。しかし、先生の笛の音を直に聴いたことがある

天理大学雅楽部による伎楽　写真⑥

者、そのお人柄に触れたことがある者たちは今となってはそれがどんなに幸福で贅沢な瞬間であったかを思い知る。先生は、私たちの記憶の中だけの存在になってしまわれた。

先生は、南都方の楽人の家系に生まれた。そのため、雅楽の修行を積み宮内庁楽部に奉職するという、雅楽の楽人の世界ではかなり当たり前の慣習に従った前半生を過ごされた。しかし、この期間にすでに笛の音頭を務め、宮内庁の奉祝曲の作曲、外部の団体からの依頼復曲、委嘱作品の作曲を行うなど、非凡な才能を発揮された。一九八四年、四九歳の時に宮内庁を退職されてからは今までの雅楽の楽人の枠を超え、いっそう新しい活動に邁進された。伶楽舎が創設されたのもこの頃である。芝祐靖が遺したものは何かと問われれば、それは、雅楽千年の伝統の音色を現代の私たちの耳にしっかりと届け、焼き付けたこと、そしてこれからの千年に向けて、雅楽の新しい魅力を探り、創り出し、あるいは、新しい創造に常に挑み続ける姿勢を私たちに見せてくださったことであろう。その結果、雅楽のレパートリーには復元曲というジャンルが生まれ、西洋音楽や他の邦楽ジャンルと融合した新しい雅楽が生まれた。また、伶楽舎は国内外で極めて高い評価を受けるトップレベルの演奏団体に育ち、古典や新作の新鮮な響きを私たちに聞かせてくれる。これらのすべてによって、雅楽は「伝統的な」あるいは「有難い」音楽から、現代社会で今なお進行中の生きた音楽となり、より多くの人々に親しまれる音楽になったように思われる。

演奏、研究、復曲、作曲、指導・・・、このような多様な分野の活動に一人の人間がかくも多大な成果を挙げるのは稀有なことである。それだけ先生が不世出の芸術家だったということになるが、振り返ってみれば、先生は立ち止まることがなかったように思われる。だから、いまここで、少しゆっくりお休みください、と声をおかけするべきなのだろう。しかし、遺された私たちは、すでに齢を重ねたいい大人であるにもかかわらず、あと少しだけ先生にはお導きいただきたかった、などと身勝手に懇願せずにはいられない。先生はきっと今頃どこかで、茶目っ気たっぷりに、ちょっとハスキーなお声で、「うふふふ、ダメ。もう自分でしなさい」とおっしゃりながら、こちらのドタバタを眺めておられることだろう。芝祐靖という稀代の芸術家と同じ時代に居合わせた倖を噛みしめつつ、私たちは、それぞれのやり方で、先生が切り拓いた雅楽の道を引き継ぎ、支えて行くことに心を尽くすべきだろう。それこそが最大にして唯一のご恩返しなのだから。

（神戸大学教授）

## 想い出

**遠藤徹**

芝祐靖先生に最初にお目にかかったのは、私が東京藝大の大学院に進学し、同大の雅楽の授業を受講したときのことでした。学部で日本史を専攻していた私は、楽家の特殊な名字は史料上でよく見かけていましたし、その楽家が現代も雅楽を受け継いでいることは頭では理解していましたが、実際に長い歴史に連なる楽家の先生が目の前に現れると深い感銘を覚えたものでした。当時雅楽の授業は土曜日の午後に行われていましたが、あの四月の土曜日の昼下がりの光景は、今も鮮明に思い出されます。

芝先生にはその後、長年に渡って千日谷雅楽会においてもご指導を賜りました。笙のクラスだった私は芝先生にご指導を受ける機会は月一回の合奏会のみでしたが、芝先生が合奏会の折に何気なく発せられる雅楽についての疑問が研究を進める上でヒントになることが多くありました。その中の一つに壹越調の問題があります。壹越調はご承知のとおり絃と管で音階が異なっています。なぜこのような不可思議な姿になったのか、私案を二〇〇四年に論文にまとめたものを芝先生にお送りしたところ、伶人の長年の疑問を解いてくれたととても喜んでくださり、当時まだ駆け出しの研究者であった私は、雅楽研究を行っていくにあたって何よりも勇気づけられました。

二〇一三年の暮れには「大名の楽しんだ雅楽～徳川治宝をめぐって～」と題する伶楽舎のコンサートでご一緒させていただきましたが、この企画を芝先生がとても気に入ってくださったことも思い出されます。演奏会のはじめに芝先生が「春鶯囀遊声」を静かに唱歌を唱えながら琵琶を独奏で厳かに奏されたお姿は、今も目に焼き付いています。このコンサートでは紀州徳川家伝来の古楽譜等から「安名尊」の只拍子の復曲も試みましたが、リハーサルのときに「安名尊」は「鳥破」に合わせて只拍子で奏することがあった旨が古書に記されていることをご説明すると、その一言で全てを納得されたご様子でした。ただ肝心の復曲の内容については芝先生のご反応も合わせて、まだまだ研究が足りなかったと痛感しております。

また芝先生は三調にある「越殿楽」の原調は平調とお考えのようでしたが、かつて源博雅撰『新撰楽譜』の目録が宮内庁書陵部から新出した折に、拙稿を通じて同目録に「越殿楽」が平調に記載されていたことに注目され、ある学会の講演でそのことに言及してくださったことも思い出されます。平調の「越殿楽」をめぐっては最近新たに平安時代の別の史料にも「越殿楽」が平調に記載されていることが確認されました。その史料について今年中に芝先生に詳しくご報告したいと思っていたところでしたので、それが叶わなくなってしまったことはとても心残りです。

芝先生は雅楽の伝承には、今伝えられているものを大切に継承することはもとよりのこと、失われた伝承を復興することや、新しい曲を創作していくことも同様に重要であるとのお考えのもとに、幅広い活動を実践され、真の伝統とはいかなるものか身をもって教えてくださったように思いま

す。芝先生が『體源抄』に収載されている豊原統秋の「笛竹の調につけて物そ思ふ世にあはぬねは有もかひなし」という和歌を好んでおられたことも改めて思い起こされます。雅楽研究に携わっている一人として、芝先生のご遺志に深く思いを致し、研究者としてできることを一つ一つ実践することでご恩に少しでも報いていければと思います。

（東京学芸大学教授）

## いつもニコニコと

**東儀秀樹**

祐靖先生が楽部にいらした頃、僕は何回か先生の個室を訪れて個人的にお話をさせてもらったことがあります。先生は雅楽も、雅楽以外もいろいろな音楽の造詣が深いところがあったのでお話をする時間はとても楽しかったのです。勝手に良き理解者と思っておじゃましていたのですがいつも快く楽しく応じてくださいました。当時僕が作ったポップスの曲まで聴いてくださったりもしました。いつも「秀樹君は何だってできるから怖いものなどないだろう?」とニコニコ言ってくれました。

実は先生が楽部を辞めると知ってまた個室を訪ね、なぜ辞めてしまうのか伺ったこともあります。そうしたら「ここは職場としてはとても安定しているのだけどなにしろやってみたいこと、発揮してみたいことがいろいろあってそれをやるにはここにいては無理なんだ。」とおっしゃり、「もしかしたら君みたいなタイプは同じくそういう気持ちになる時がくるかもしれないよ。」なんていう言葉も交わしていたのでした。

それから何年か経って僕は楽部を退職しました。そしてその後何度か仕事場などでも先生とお会いする機会があり、その都度「ずいぶん活躍しているねえ!」とまたニコニコ話してくださいました。そして僕が雅楽師として都民栄誉賞を頂いた時もすぐにお祝いのお手紙をくださいました。勝手ながら同じような志で楽部を辞めたのだという共感を感じさせてもらっていました。

あるホールの楽屋でご一緒した時、僕が「先生が楽部を辞めたのを目の当たりにしていたから僕も辞める決心が持てたのですよ」と談笑したら「いやあ、それを言われると困っちゃうなあ、、」と、これまたニコニコしていました。それがなんだかとても嬉しそうな表情だったのが忘れられません。

先生が亡くなられたあと、ご子息様から「父が、秀樹さんが楽部に入ってきた時、すごいやつが入ってきたぞ、ととてもわくわくしていたんです。」と伝えられました。憧れていた祐靖先生に最初からそのように言ってもらえていたこと、これこそが僕の大きな誉です。

いまでも天国から「やってるねえ」とニコニコしてくださっているような気がします。

（雅楽師）

## 追悼　芝祐靖先生

**佼成雅楽会　菅野康正**

芝祐靖先生におかれましては、令和元年7月5日83年にわたる生涯を閉じられました。佼成雅楽会一同、いまここに、先生への感謝と哀悼の意を込めて追悼文を捧げさせていただきます。

当時27歳のお若き芝先生が佼成雅楽会の講師としてお越しいただいたのは、昭和37年1月でした。爾来平成29年9月、82歳でご退任されるまで55年間もの長きに渡り、熱心なるご教導を頂戴いたしました。

毎週一回のお稽古はもちろんのこと、毎年夏に2泊3日で開催している合宿では寝食を共にしていただきましたことも、誠に懐かしく思い出されます。

昭和57年、当雅楽会の母体である立正佼成会開祖庭野日敬の喜寿を寿ぎ、芝先生に委嘱した舞楽曲「嘉祥萬寿楽」は、古典の舞楽曲には見られない合唱と雅楽器および古楽器である鞨、方響の合奏が試みられました。

先生は『嘉祥萬寿楽の作曲のポイントは、雅楽器と合唱を対等に扱った合奏形態にあります。古代中国音楽や平安時代の催馬楽・朗詠にも雅楽器と歌謡の合奏はありましたが、これらはあくまでも歌謡中心で雅楽器は伴奏方にすぎません。今回は互いに主題を持つものの合奏としました。合唱は古代歌謡独特の悠長な旋律とリズムを現代化して、歌詞の聴きとりやすいリズムとし、また親しみ易い旋律としました。前後の雅楽合奏も祝典曲にふさわしく軽快な合奏曲としました。』とおっしゃっておられ、古典の形式の中にも現代感あふれる作品で、全体に平和への願いと喜びを表わしていただきました。

先生の指揮のもと、昭和57年の第20回定期公演で初演、その後は第21回、第43回、第50回で再演させていただきました。そして昨年平成30年夏、第55回定期公演での指揮をお願いに先生のご自宅にお伺いしたところ、嘉祥萬寿楽と6曲の委嘱作品の原譜を私共に出され、にこやかな表情で『この原譜は佼成雅楽会の方にお渡ししますから自由に使ってください』とのこと。ありがたさとともに何か先生との縁がこれで切れてしまうような寂しさを感じた思いがいたしました。そして先生より『私が指揮をするのは今回が最後でしょうから、そろそろ新しい方に指揮も託さないと…』とのお言葉でありました。佼成雅楽会一同、暮れの演奏会に向け心ひとつに取り組ませていただいたのは言うまでもありません。また、演奏会の練習・リハーサルにお越しいただいた際には、何年かぶりに復

2018年12月9日第55回佼成雅楽会公演で自ら作曲の「嘉祥萬寿楽」を指揮する芝先生。写真提供　佼成雅楽会

活した迦陵頻の子供たちもお会いしていただき、『よかったね。頑張るんだよ』と優しくお声がけを頂戴し、新しい世代に雅楽が継承されていることを非常にお喜びになっておられたことが印象的でありました。

12月9日第55回定期公演本番、先生をお迎えし「嘉祥萬寿楽」が始まり会場より盛大な拍手の中、上手より先生がご入場。指揮台に立たれたお姿は、お歳を召されてなお凛とされ、その存在感は会場の隅々まで影響力が感じられました。演奏が終了し会場からは万雷の拍手が止みませんでした。

この演奏会は、芝先生のもと歩ませていただけた佼成雅楽会の昭和平成の集大成であり、忘れえぬ宝となりました。

その感動冷めやらぬ7か月後、先生がお亡くなりになろうとは、雅楽会員一同夢にも思いませんでした。

大きな存在である先生とのお別れは、深い悲しみではありますが、私達の上に、これからも先生の温かい眼差しが注がれていることを信じ、益々の雅楽の研鑽をお誓いし、感謝の心を捧げて結びとさせていただきます。

芝先生、本当にありがとうございました。

## 芝祐靖先生から「預かった」もの

### 天王寺舞楽協会常任理事　小野真龍

芝祐靖先生とのお別れを心から悼みます。

芝先生とは亡父の代から親しくお付き合いさせていただいていました。特に、五年前に芝先生を相愛大学へお招きしてご講演いただき、先生の前で、雅楽団体の枠を超えたメンバーによって、先生の作品である「舞風神」を演奏したことは、本当に楽しい思い出です。このことがきっかけとなって翌年ドイツのフライブルク音楽大学でも、「舞風神」を演奏して先生の作品を紹介できました。しかし、われわれの拙い演奏で、先生の「楽」恩に報いたことになったのかどうかはわかりません。

三年前には、われわれの演奏会のプログラムにご寄稿いただいたこともありました。その取材で、東京の先生のご自宅にまでお伺いした際に、「東京まできていただいて大したお土産もお渡しできないのだが、これを小野さんにお預けするので、宜しくお願いいたします」と上下巻二冊の古い譜面をお預かりしました。それは、「龍笛枢要録」と題された江戸時代の笛譜で、享保元年（一七一六年）に天王寺方楽人の岡昌倫が記したものでした。芝家に伝わっていたものだそうです。天王寺方の譜面が南都方の芝家に伝わっているということについては、やや奇異な感じがしますが、江戸期は三方楽所共同で演奏する機会もあったこと、また、三方楽所同志で養子の出入りが頻繁にあったことから、不思議なことでもありません。

「こ、こんな貴重なもの頂いていいのでしょうか?」と恐縮してお尋ねすると、「いいのです。芝家で雅楽をする者がもういないので、うちにおいておくよりお寺にお預けする方が後世に残るでしょう」。「それでは頂戴致します」と申し上げると、「でも、あなたの所有物にしてもらうというのではなく、「お預け」するのです。将来へ残していってくださいね」と言われました。その際、芝先生個人からというよりは、「雅楽」伝承の大きな歴史の流れそのものからお預かりしたような強い感銘を受けました。

芝先生は、悠久の雅楽の歴史を俯瞰しつつ、ご自身のお役目をその中に位置づけて活動しておられていたように思います。雅楽の本質を伝えること、また、その新たな可能性を探ること、という観点から、雅楽団体の枠組みにとらわれることなく、御教導されていたと感じています。お預かりした譜面には、楽曲の譜字や手付だけではなく、天王寺方の故実についての多くの書き込みが残されていて、江戸期の天王寺方伝承の実態を研究するうえでも大変貴重な資料となっています。この譜面から多くの成果を導きだすことを心がけるとともに、芝先生の想いが籠められた譜面そのものも、後世に「預け」継いで行きたいと心に期しています。

## 心よりご冥福を　お祈り申し上げます

### 大阪楽所　代表理事　中川英男

芝祐靖先生の突然のご逝去に驚いています。

昭和57年大阪楽所結成を目指し、大阪雅楽同好会と云う名前で雅楽講習会を始めるに当たり、笙・多忠麿　篳篥・東儀兼彦　笛・芝祐靖の三先生のご来阪を願い出発致しました。以来稽古を重ね、翌58年8月4日大阪楽所結成記念公演を、大阪労働会館大ホールで開催いたしました。芝祐靖先生には、第一回から十回まで講師としてご指導頂くだけでなく三先生の講師演奏としての客演は、大阪楽所演奏会の名物となりました。

第十回記念演奏会まで11年にわたり足しげくご来阪ご指導頂きました御恩に、改めて御礼申し上げますと共に、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

## 笑顔、力強さと明晰さ

### ～芝祐靖先生の思い出～　上野慶夫（洋遊会）

私は篳篥奏者だが、芝祐靖先生の力強い龍笛に早くから魅せられていた。

その先生の直接ご指導を受ける機会があった。昭和の終わりの年、私が所属していた小野雅楽会が百周年記念公演のため、芝先生に古典の復元を委嘱したのである。これが、「露台乱舞」で近年、伶楽舎による公演もNHKで放映された。

練習は、日頃演奏したことのない歌曲を芝先生が分かりやすく説明、指導されるので、大変楽しかった。

ところが、本番でアクシデントがあった。この作品の幕切れは絃楽器入り、歌入りの萬歳楽の淵酔舞楽のあと、「伊佐立奈牟（いざたちなむ）」という歌とともに、まず上卿役の小野亮哉会長が、続いて歌役の我々が満ち足りた表情で順々に退場するという演出だった。

その萬歳楽があまりうまく決まりすぎたのか、国立劇場のスタッフが止め手とともに緞帳を下ろしてしまったのである。慌てたチーフが「おい、幕、上げろ！」となったので再び緞帳は上がったが、観衆はカーテンコールと思ったらしく、万雷の拍手だ。

舞台中央でびっくりされた亮哉会長のお顔も忘れがたいが、すかさず、舞台袖から芝先生が満面の笑みであらわれた。会長とがっちり握手、花束を受けて満員の客席の拍手に何度も答礼された。お客様は素晴らしい幕切れだと感動して帰宅されたことだろう。見ていた私は当時の流行語、「役者やのう！」が頭に浮かんだ。苦心の幕切れをカットされた無念さは微塵も感じられず、芝先生の笑顔は水際立っていた。

その後、私は故郷の富山へ帰り、当地で伝統の雅楽団体、洋遊会を率いることとなった。雅楽協議会の活動を通じて先生との接触が始まり、雅楽のユネスコ無形遺産登録問題で一緒に文化庁を訪問したり、四天王寺の精霊会を隣席で見学させていただいたりと、思い出は尽きない。私の著書のご批評から始まって雅楽についてのご教示も受けた。その過程で先生の雅楽、音楽への情熱と頭脳明晰さ、そして力強い決断力に感心させられることが多かった。そしてどんな時にも、あの笑顔でわかる心あたたかさがあった。

一度、北陸へ先生をお呼びし、我々の公演をお見せしたいと思っていたが、ついにその機会はなかった。ただ、公演の写真をいろいろお送りした中で、ここに掲載の写真には特別のお褒めの返書を頂いた。洋遊会の根拠地、高岡市福岡町の三千本の桜並木のもとで行った童舞、「迦陵頻」の入る手のところだ。

「この世のものとは思えない。まさに極楽浄土の演奏会ですね。僕はいっぺんでいいからこんな夢の雅楽をやりたいです。うらやましい！」。

これは単なるリップサービスだったのかもしれないがうれしかった。今頃は本当にご自身で極楽浄土の夢の演奏会をなさっていることだろう。

桜並木のもとで迦陵頻
写真　洋遊会

## ご指導頂いたご恩は忘れません

**音輪会　川口 智康**

当会は関西でも芝先生の雅楽の指導を受けたいという思いから平成8年に発足いたしました。発足当初より当会音楽監督としてご指導頂き、昨年の第19回演奏会にも第二部雅楽アラカルトにてご出演頂きました。

ご指導の合間には今の雅楽は京都で完成されたと説かれ、京都で雅楽を演奏することの重要性を常に話して頂きました。

京都にちなんだ催馬楽を多く選曲頂き、中でも梁塵秘抄より引用された綾衣傘（あやいがさ）は、鴨川に流れる傘と男女の想いを曲にされ、冒頭の「君」の発音についてのイメージをお話し頂き、未熟な我々演奏者に伝えて稽古したことを覚えています。

常に聞く側の気持ちを第一にされており、突然演奏曲が変わることもありました。また雅楽アラカルトでは当日に資料をお持ちになられ、急ぎコピーしたことを覚えています。いつも演奏会が始まるまで気が抜けませんでした。今では先生と各演奏会を結びつける良い出来事だったと思います。

今年の曲目は管絃では承和楽や海青楽などを作曲したといわれる大戸清上が作曲した清上楽。舞楽では続きがあったのではないかと考えられ、先生が急を補曲した散手破陣楽と、先生が京都の骨董店で一目惚れした面をお借りして舞う貴徳を演奏いたします。

技術はもちろん様々な事をご指導くださいましたご恩は決して忘れることはできません。先生から頂いたご縁で結ばれた雅楽の道を一歩ずつ歩み、ここ京都に残して参ります。

先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

## 芝祐靖先生の御逝去を悼む

**佐藤浩司　天理大学雅楽部総監督**

こんなに早く先生とお別れするとは。唯々悲しい、悔しい。

私が、先生の生の演奏を聞かせて頂いたのは、昭和45年春の楽部の演奏会でした。御神楽の「其駒」で、東儀良夫先生の篳篥に合わせて吹いておられました。人長は多忠麿先生でした。この年は、大阪で万博が開催されており、鉄鋼館のスペースシアターで武満徹氏の企画で楽部の演奏があり、私も拝聴致しました。木戸敏郎氏の慫慂によって、「秋庭歌」の曲想もこの頃のことかと思います。

先生と舞台でご一緒させて頂いたのは、昭和53年8月25日、天理市民会館でした。天理教道友社が、名演奏家シリーズの一つとして、紫絃会の演奏があり、私は舞台のお手伝いをさせて頂きました。リハーサルで、多忠麿、東儀兼彦の両先生と丁々発止、しかも息の合った演奏は、身の震えを覚えた程です。琵琶は山田清彦先生、箏は東儀俊美先生でした。昭和55年、先生と身近に親しく接させていたく機会が、伎楽の復元によって得ることできました。東大寺の屋根を葺き替える大工事が行われ、その落慶の中日に伎楽が演じられることになりました。伎楽は、天平勝宝4年の大仏開眼法要の折には盛大に演じられたのですが、平安時代になり次第に演じられなくなり、いつしか「幻の天平芸能」となっていました。その復元を、小泉文夫、笠置侃一、東儀和太郎、吉岡常雄の先生方に、音楽担当として携わったのが先生でした。この企画を提案したのが堀田謹吾氏（当時、ＮＨＫ教養番組部のチーフ・ディレクター）です。東大寺の折には4曲が作られ、あとは打楽器による演奏だけでした。雅楽部は、天理、大阪、東京と定期公演を開いており、折角伎楽が復活したので、それからの定期公演に伎楽を演ずるようになりました。（つづく）

（佐藤氏より長文の追悼文を頂戴しましたので連載とさせていただきます）

≪≪≪≪≪≪≪≪（1ページ下段最終行より）

「葦」など、様々な呼び方がありますが、ここでは混乱を防ぐため、生物材料学の分野で一般的に使われる「葦」を用います。もちろん、これはあくまで便宜上のものであり、どう呼んでも問題はありません。

葦は、種から発芽するだけでなく、地中に残った地下茎からも発芽します。成長が非常に速く、他の植物に先駆けて大きくなるため、葦が生えている場所では、他の植物があまり育ちません。葦は、竹と同様、非常に繁殖力の強い植物だと言えます。

淀川流域・鵜殿地区の葦は、古くから蘆舌に最適と言われてきましたが、鵜殿の葦なら何でも良いというわけではありません。鵜殿には、河原に水を引くための導水路が設けられています。導水路の周辺は、通水時に水に浸ります。このような「水域」で育つ葦は、面積当たりの本数は多いものの、茎が細く[1]、肉薄で[2]、稈の密度が低いものが多く[3]、蘆舌には適していません。（写真①）一方、河川敷には、水に浸らない乾いた土地もあります。このような「陸域」では、面積当たりの本数は少ないものの、高く、太く、肉厚で[1,2]、稈の密度が高い[3]葦が育ちます。蘆舌に使われるのは、このような陸域の葦です。（写真②）

水域の葦　　写真①

土質や標高は、葦の草丈や茎の太さにあまり影響を与えないことがわかっています。また、鵜殿の葦に特有の遺伝子があるわけではなく[4]、蘆舌に適した葦の中にも複数の異なる遺伝子があり、遺伝子が同じであっても、蘆舌に適したものと適さないものがあります。

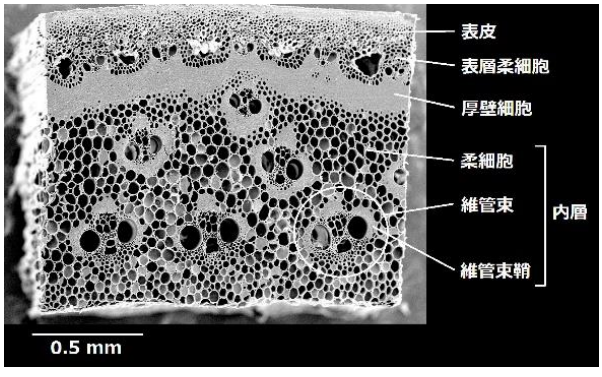
陸域の葦　　写真②

このように、同じ「鵜殿の葦」でも、水環境によって草丈や太さや稈の密度が大きく異なります。少なくとも現時点では、鵜殿の葦が特別な葦であることを示す科学的な証拠は見つかっていません。「鵜殿の葦は繊維の密度が高い」と言う人もいますが、後で述べるように、葦の密度は同じ節間の中でも大きく異なります。鵜殿の葦の繊維密度が高いと断言するためには、何千本と言う葦を詳細に調べ、統計的に差があることを証明しなければなりませんが、そのような取り組みが行われた例はありません。

もちろん、鵜殿は歴史的に重要な葦の産地であり、鵜殿の葦原を将来に渡って保全することはきわめて重要です。ただ、葦の品質は、産地ではなく、生育環境（特に水環境）や材質によって判断するのが合理的だと言えるでしょう。

他の植物に占拠された葦原　写真③

現在、鵜殿の葦原はいくつかの問題を抱えています。最大の問題は、クズやカナムグラなど、繁殖力の強い草本植物の侵入です。頻繁に水に浸るエリアでは、葦の方が草本植物より「強い」ので、心配はありません。問題は、蘆舌に適した「陸域の葦」です。乾いたエリアでは、草本植物が葦よりも早く成長したり、つる性の植物が葦を引き倒したりして、葦が成長するのを邪魔します。その結果、鵜殿の一部のエリアでは、葦が完全に駆逐され、草本植物に占拠されています。（写真③）したがって、「蘆舌用の葦を守ること」と「葦原を守ること」を分けて考える必要があります。どんな葦でも良いなら、水を引けば葦が育ちます。しかし、蘆舌用の「陸域の葦」を守ろうとするなら、他の植物の侵入や繁茂を防ぐ努力をしなければなりません。篳篥や雅楽を守りたいなら、葦原と蘆舌用葦を混同せず、冷静に議論する必要があります。



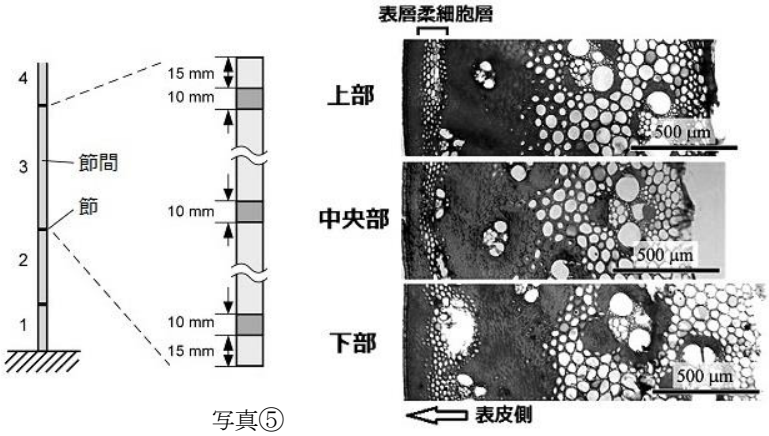

葦の構造　写真④

## 2　葦の構造

ここで葦の構造について簡単に説明しま

す。（写真④）蘆舌用の葦の構造は、竹や、西洋のリード楽器に使われる葦（*Arundo donax*）とほぼ同じです。

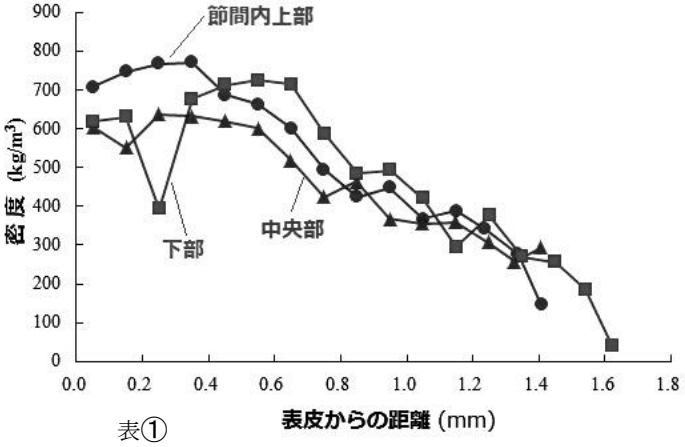
硬い表皮の内側には、スカスカの（密度の低い）表層柔細胞層があり、その下には硬い厚壁細胞層があります。葦に刃を当てて表皮を削るとき、スッと刃が入るのはこのためです。一方、蘆舌の振動する部分に相当するのは、柔細胞と維管束からなる内層部です。この部分では、鉄筋のような維管束鞘（いわゆる繊維）の間を、スカスカの柔細胞が埋めています。内層部の密度や振動特性は、繊維の数や配置によって決まります。




写真⑤

面白いことに、同じ節間でも、上部と下部とでは稈壁の厚さや密度に明らかな違いがあります。これは組織構造の違いに由来します。（表①）

上の写真⑤にあるように、節間の上部は稈壁が薄く、表皮付近が高密度であるのに対し、下部は肉厚で低密度です。このような特徴は、鵜殿以外の葦にも見られます。つまり、稈壁の厚さや密度は、葦の良否や産地の違いとは無関係に、節間内の位置によって大きく変わります。そして、通常は節間の上部が蘆舌に使われることから、同じ直径であれば、薄く、密度の高い部位が蘆舌に適しているのではないかと推察されます。




表①

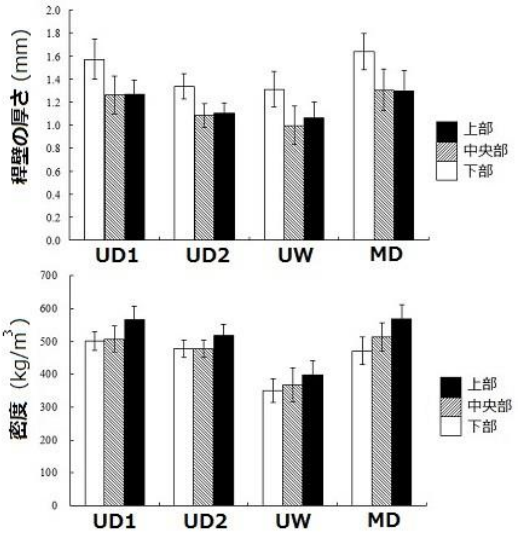
葦の選別　写真⑥

## 3　葦の良し悪し

２０１４年、鵜殿で長年蘆舌用の葦を刈り取っておられる方々（以下、葦刈り職人と呼びます）にお願いして、直径 12 ㎜前後の葦から「蘆舌に適する葦」を選んで頂きました。（写真⑥）また、通常は蘆舌に使わない水域の葦と、他地域（宇治川流域の向島）の葦についても測定を行いました[3]。（表②）

稈の直径がほぼ同じであっても、水域の葦（ＵＷ）は、陸域の葦（ＵＤ１、ＵＤ２、ＭＤ）より明らかに薄く、密度が低いことがわかります。一方、蘆舌に適した葦（ＵＤ１）と適さないもの（ＵＤ２）を比べると、適した葦が若干厚いものの、密度はほぼ同じでした。また、向島の葦（ＭＤ）とも大差ありませんでした。稈壁の厚さ、密度、産地の違いは、葦刈り職人の考える葦の良否とはあまり関係なさそうです。では、葦刈り職人が選ぶ「蘆舌に適する葦」は何が違うのでしょうか？

次ページのグラフ（表③）は、葦を横に押しつぶしたときの強度（横圧縮強度）を比べたものです。葦の種類に関わらず、上部が最も高い強度を示しました。これは、全体の密度が同じでも、上部の方が表皮付近の密度が高いためと考えられます。また、蘆舌に適し

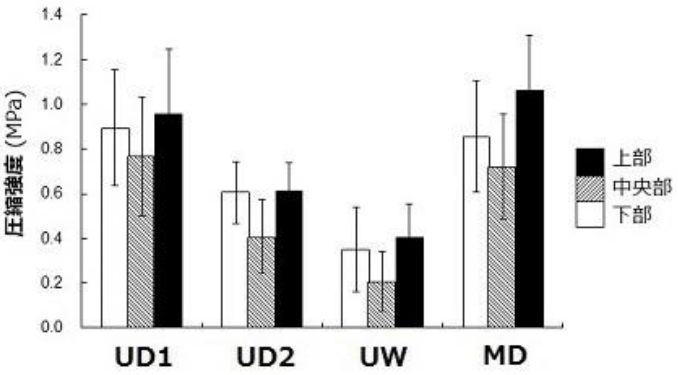



表②

**稈壁の厚さと密度**

ＵＤ１：蘆舌に適した鵜殿の葦、
ＵＤ２：蘆舌に適さない鵜殿の葦、
ＵＷ　：鵜殿の導水路中の葦、
ＭＤ　：他産地（宇治川流域向島地区）の葦

た鵜殿の葦（ＵＤ１）の強度が、蘆舌に適さない葦（ＵＤ２）や導水路中の葦（ＵＷ）よりも明らかに高いことがわかります。葦刈り職人がどのような感覚に基づいて葦を選んでいるかははっきりとはわかっていませんが、少なくとも、つぶれやすい葦が除外されているのは間違いないでしょう。




葦の横方向の圧縮強度　表③

次回は、葦の振動特性と、篳篥奏者が葦を選ぶ際の基準について解説します。

**資料**

[1] 第５回 新名神高速道路 鵜殿ヨシ原の環境保全に関する検討会，資料２-１

[2] 第６回 新名神高速道路 鵜殿ヨシ原の環境保全に関する検討会，資料２-１

[3] 中西遼，小幡谷英一：木材学会誌 **62** (6)，２６５（２０１６）

[4] 第５回 新名神高速道路 鵜殿ヨシ原の環境保全に関する検討会，資料２-３

**謝辞**

本研究は、日本学術振興会・科学研究費補助金の助成を受けて行われたものです（特定企業の利益や民間団体の主張とは一切関係ありません）。研究の遂行に当たって、以下の方々より様々なご助言、ご協力を頂きました。ここに記して謝意を表します。

・ 宮内庁式部職楽部（葦および蘆舌全般に関する助言）
・ 木村和男氏、平城健次氏（葦の選別、伐採に関する助言）
・ 西日本高速道路株式会社（資料および試料の提供）